

共同研究 ● 近世カトリックの世界宣教と文化順応（2014-2017年度）

大航海時代の幕開けにより、ローマ・カトリック教会の世界宣教は著しく進展するが、アジアやアメリカに渡った宣教師は、しばしば現地の慣習や規範を習得し、地元社会に溶け込むことで、現地人の改宗を促そうとした。宣教師のこの「適応（accommodatio）」にはすでに多くの研究があるが、本研究ではこの問題に従来とはやや異なる視点からアプローチしてみたい。この小論の目的は、そのアプローチの特徴のいくつかを素描することである。

適応のイニシャティヴ

近世グローバル・ミッションの研究では、適応という言葉は、宣教師が赴任先でキリスト教会を建設するとき、現地の制度や実践を新たな教会の構成要素として取り込むこと、またはその存在を容認すること、という意味で用いられてきた。本研究は基本的にこの用語法を踏襲する。しかし、従来の研究には適応における宣教師のイニシャティヴを自明とみなす傾向があり、本研究はこの点について疑問を呈したい。

宣教師の著作では、適応はしばしば方針として定式化され、理論的に正当化されている。それゆえ、現代の研究者は、まず方針や理論が先にあり、それが実践に移されたと考えがちである。しかし、この点については再考が必要である。現場における宣教実践は多様な要因に左右され、かならずしも方針どおりに進まない。現地の事情に疎い宣教師は地元出身の協力者に依存せざるをえず、彼らの見解や意図に影響されがちになる。宣教師の教えに接した現地人はそれを自己流に解釈し、ときに正統から逸脱した実践を発展させる。在来の慣習や規範は容易に変えがたく、宣教師はしばしば意に沿わぬ妥協を強いられる。結局、現場における宣教師のイニシャティヴは、彼らの著作が示唆するほど大きくないのである。

おそらく、現代の研究者が適応と呼ぶ実践の多くは、宣教師が率先して進めたものというより、現地の人びとが独自に発展させた異種混交的な宗教実践を宣教師が追認した結果、あるいは、宣教師が在来の制度や実践へ妥協を強いられた結果ではなかろうか。この点を明らかにするためには、宣教現場における異文化交渉に注目する必要がある。

適応と異文化交渉

従来の研究では、適応は一部の開明的な宣教師が主導した特殊な宣教方針として扱われがちであり、事実そうした側面も否めないが、本質的にはありとあらゆる異文化交渉に随伴するありふれた現象である。適応をコミュニケーションの一形態としてみた場合、その中核にあるのは、自己の振る舞いを他者の論理や価値と了解したものにより正当化することで、自己を他者に理解してもらおうとする意志である。それゆえ、当事者の一方が他方を暴力的な手段で完全に統御できるという例外的な状況を除けば、適応は異文化交渉に不可欠の方策である。なぜなら、相手を暴力により強制できないなら、説

得して動かすしかなく、相手を説得するためには、相手の行動や思考を理解し、それに即して相手に働きかけねばならないのだから。

この意味における適応は宣教師の専有物ではない。現地人もまた宣教師の行動や思考を理解しようと努め、その理解に即して宣教師に働きかけ、彼らを動かそうとした。それゆえ、適応は双方向的である。それでは、ヨーロッパ人がアジアやアメリカの人びとに適応したやり方と、後者が前者に適応したやり方には、質的な違いがあったのだろうか。幾人かの研究者は、前者を計算ずくめの演技、後者を全面的な投帰とみなし、その違いの原因を他者観や情報伝達方式の違いに求めている。興味深い見解だが、慎重な再検討が必要だろう。

適応と異文化理解

近世カトリックの世界宣教はヨーロッパ人の異文化理解のありようを大きく変えたといわれている。具体的には、ギリシャ・ローマの古典やキリスト教の教義を絶対視するテキスト至上主義から、現場における経験的観察を重視する姿勢への変化、そして、人間の社会と文化の単一性を標準とみなし、その多様性を偶発的で異常とすらみなす姿勢から、人間の多様性こそを標準とみなし、その単一性に疑いすら投げかける姿勢への変化である。こうした変化は一朝一夕に成し遂げられたわけではなく、古典古代の文芸復興に伴う世界観・人間観の刷新と、大航海時代以降の非ヨーロッパ世界の知識の増大というふたつの現象の相乗作用により、長い年月をかけて生じたものである。

宣教師の適応に関する従来の研究は、それが当時形成されつつあった新たな異文化理解に裏打ちされていたことを強調している。事実、経験的観察の重視と社会文化的多様性の承認は、適応の前提条件そのものである。しかし、研究者のなかには、適応の先進性を称揚するあまり、それを現代の多文化主義になぞらえ、時代錯誤に陥る者も少なくなかった。実際には、宣教師の異文化適応には明確な限界があった。その限界とは「野蛮」と「異教」である。野蛮とは人間の自然本性に反する非理性的で反社会的な行為の一切を指す。とりわけ、移動生活を営む狩猟採集民は存在そのものが非人間的な「野蛮人」とみなされ、その社会と文化は根絶の対象となった。他方、異教とはキリスト教以外の「偽りの宗教」を指す。異教は原則として根絶の対象だが、そのキリスト教との類似は否定しがたく、しばしば根絶と適応がないまぜになった複雑な対応がとられた。たとえば、アメリカでは、破壊された異教の神殿の遺構のうえにキリスト教の聖堂が建設されるといふ両義的な戦略が広く実践された。

適応はたしかに異文化理解を要請する。しかし実のところ、それを妨げもする。適応とは切り詰めれば自己を他者と同じものとして提示することで他者に自己を受け入れさせる行為である。それゆえ適応は、自文化と異文化のあいだに一对一



ペルー共和国、アヤクチョ県、ビルカスワマン市のサン・フアン・パウティスタ聖堂。インカ時代の太陽の神殿の遺構のうえに建てられている（2010年）。

の対応関係を確立することに大きな関心を寄せる。たとえば言語のレベルでは、同義語を見つけ出し、それを使って言いたいことを手っ取り早く表明することにこだわる。それぞれの言葉が内包する意味の範囲が微妙にずれていても、あまり関心を払わない。結果として適応は、ふたつの文化のあいだに表面的な並行関係を確立するだけで満足してしまい、異文化の本質に迫るような深い考察を無用にしてしまう。

適応の理論

宣教師はしばしば個々の適応行為、または適応方針一般が正当であることを裏づけるための理論を練り上げた。代表的な理論をふたつ挙げると、

①「自然宗教」：一部の宣教師の考えでは、彼らの来訪以前、アジアやアメリカの人びとは理性の働きにより神を発見し、崇拜していた。また、自然法を遵守して、善を追求し、悪を忌避していた。この見解に従えば、在来の宗教や倫理、政治や法律はキリスト教会建設の土台となりうる。実際、中国では儒教、インドではバラモン教、アメリカではインカ帝国宗教が自然宗教の一種とみなされ、適応の対象となった。

②「中立的なもの (adiaphora)」：中立的なものとはストア哲学の用語で、それ自体として善でも悪でもないものを指す。近世ヨーロッパでは、この概念は、カトリック教会への譲歩を迫られ、その儀式を部分的に受け入れざるをえなかったドイツやイギリスのプロテスタントが、その事実を正当化し、当の儀式がそれ自体として無害であることを主張するため採用した。他方、非ヨーロッパ世界に派遣された宣教師は、現地のキリスト教徒が在来宗教の慣行を完全に放棄できないとき、それへの関与を正当化するため、この概念を採用した。

適応の理論について考える際、まずそれがどのような経緯で、誰に向けて作られたかを究明する必要がある。適応の理

論化は、多くの場合、現場の要請に応じてすでに実践されていた適応が、何らかの経緯でヨーロッパ人の視線にさらされ、その正当性に異議が唱えられたことを契機としてなされている。つまり、理論は既存の実践を正当化するためあとから作られたのである。適応の理論化はまた、現地の知識人をキリスト教会に取り込むためになされた可能性がある。とりわけ自然宗教説は、彼らが体現する在来の知的伝統をキリスト教の観点から再評価しているため、彼らにとって魅力的だったと思われる。他方、神学的論争とは無縁の農民や漁民に対するとき、宣教師は適応を理論化する必要性を感じなかった。

宣教現場では適応の理論はその実践に対して二次的だが、ヨーロッパへの影響という点では、理論が実践を重要性において凌駕する。アジアやアメリカの宣教師の適応実践がヨーロッパに直接の影響を与えることはないが、その実践がヨーロッパ人の視線にさらされ、その正当性に異議が唱えられ、論争が始まると、その影響はヨーロッパにも及ぶ。その影響の内実には未解明の部分が少なくないが、啓蒙思想の発展と密接に関連していることは、多くの論者が認めている。

本研究では、発足から1年半のあいだ、先行研究の検討と問題点の洗い出しを行ってきた。本論はその問題点のいくつかに焦点を当て、解決の方向性を研究代表者個人の視点から素描したものである。今後はメンバー各自の専門性を生かしながら、本研究独自の成果を積み上げていく予定である。

さいとう あきら

国立民族学博物館先端人類科学研究部教授。専門は文化人類学、ラテンアメリカ研究。単著に『魂の征服—アンデスにおける改宗の政治学』（平凡社 1993年）、共著に『南米キリスト教美術とコロニアリズム』（名古屋大学出版会 2007年）など。